



繁茂最盛期の花豆畑

元気な花豆畑

花豆畑は繁茂の最盛期を迎え、実が熟しかけてさやは丸々と太り、間もなくさやが茶褐色になるのを見はかり、順次収穫されていきます。

※(1) 福島県緊急雇用創出基金事業:下郷町着地型ソーリス



からふるローソク作り (楢小4年)

△推進事業＝着地型観光(滞在してもらう旅行・観光)をデザイン・企画し観光客の誘客を促進する事業。これを下郷町商工会で取り組んでいる。

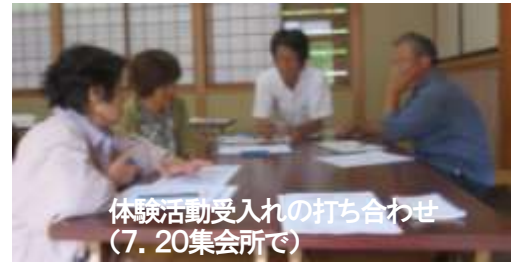
※(2)平成25年度ふくしまっ子体験活動応援事業＝福島県が、子どもたちが伸び伸びと活動できる環境の中で、自然体験活動や交流活動を実施する幼稚園、保育所、小、中学校、特別支援学校



バランス石作り (楢小4年)

幼稚園部・小学部・中学部・社会教育団体等(スポーツ少年団や子ども会など)に、宿泊費と交通費・体験活動費を補助する。

きるものはないかとの働きかけを受け、昨年から山桜学校を活用した体験活動を受け入れていきます。
町内小学校の学年行事もこの事業のひとつとして行われております。



体験活動受入れの打ち合わせ (7.20集会所で)

下郷町商工会が力を入れている観光誘客事業の一つである(※1)「下郷町着地型ソーリス」や「ふくしまっ子体験活動応援事業」など、戸赤で実施する。

山桜学校に歓声響く

「ふくしまっ子体験活動応援事業」などで

このさやが茶褐色になると収穫 (7月23日撮影)



おにぎりは持参しソープを山桜学校で提供して好評を得た楢小4年学年行事(7.13参加者46人)

【木地の学習No.33】この年君ヶ畑は三簿冊を残している。その中で特筆すべきことは、三五、三六号の簿冊に渡木地師としての記載があることである。以前より会津では「木地師」「渡木地」として木地師仲間あるいは研究者の間で、そのような言葉でもって取り扱われてきたが、両者の明確な区分がなされてこなかったきらいがあり、研究者の間でも、まちまちの解釈でもって文章化されてきた。従って、「木地」と「渡木地」を定義しなければ、三五、三六号簿冊の「渡木地師」を論ずることはできない。明治十三(1880)年、明治十五年の氏子狩については、蛭谷、君ヶ畑ともに関連する文書は見当たらないが、惟番親王千年忌に向けての寄付が目的である。……そして明治二十六(1893)年は両所最後の氏子狩となり、ここに日本中の木地師を支配した根元地の幕をおろすことになるのであった。「寄進帳」が現存しているが、君ヶ畑では作成しなかったようである。回国人は野瀬兵七と小椋亀次郎であった。橋本鉄男『木地屋の移住史』は、最後の回国人の話を採用し、「小椋亀次郎翁旧事談」として記載している。(会津地方歴史民俗資料館「木地語り」より) (つづく)



戸赤で育った愛好家 各地で活躍



地元物産として店舗の一角を飾る木地製品
(道の駅しもごう)

戸赤の木地工房で育った木地愛好家が、各地で活躍している話題が届いています。市民センターの行事に出品するなど、趣味として木地と漆の加飾を続け、今なお講師と連絡を取り合い技術を磨いている方(西郷村)、自分で工房を開き作品をイベント等で販売したり、物産直売所にコーナーを確保している方(南会津町)など、木地の仲間が地域の活性化に貢献できていることはうれしいことです。

戸赤の木地工房はしんごろうの食事も広まり、町の観光の穴場として人気スポットにもなっています。

山桜感想ノートから

冬もいよいよやほは夏ですね!
遠くまで、避暑地も満喫して7月
2013/7/13-14

今年初参加で来させてもらいました
来て良かったけど、ネットの事で一体感がうけて
運に上がったです。
次回がまた来たいです!! ありがとうございます!!
2013/7/14

山桜感想ノートから

和やかな戸赤でしたが、暑い時間を過ごせました。
雨は降ってほしかったです。9月まで暑い時間でした!
ありがとうございました
2013/7/13-14

良いところをウツサに聞いていただきました。想像以上でした!
真心に込めて「夏休み」をまわりました。
次は晴々の戸赤を楽しみます。ありがとうございます。
2013/7/13

山桜学校からの話題



このグループは5年目になり常連が準備、後片付けをリード
(7.13~14 27人)

楽器
を宅配で送り、飛行機や新幹線、レンタカーを乗り継ぎ関東関西から集まった二十七人の若者たち。大好きな軽音楽を気兼ねなく楽しみました。食料を買い込み、時間に制限なく自然のなかでしばしの間、非日常を体験しました。

(ストーリー性のある村づくりのために) [No.4] 紅梅御前 紅梅御前は高野大納言の息女で、橘姫と申し上げた。以仁王の中宮で御年は十七歳。お供には堀八十次と岩瀬小藤太という者がつきそってきたが、堀八十次は岩瀬郡逢坂峠の麓の田ノ内村というところで長旅の苦勞がもとで病死した。それからは小藤太一人でお護りしてきたが、八月二十四日、大内の宿に着いたときには王はすでに越後に向けて旅立たれた後であり、二十六日にはまた侍女の桜木姫と別れなければならなかった。妃は深い悲しみの中にあつて小藤太を供われ、以仁王の通られた道筋をたどって戸石村の五郎兵衛宅を訪ねられたが、このとき妃はお腹に子どもがいて心身の疲労は深く、遂に床上に寝たままになられたのである。そして、王にお逢いになれないままあの世に先発つことの悲しみを切々と小藤太に訴えながら、二十八日の明け方、これまた逝去なされたのであった。小藤太は泣く泣く王の落ちていかれた越後なる小国の郷に跡を追い、重なる悲報を王の弔うべき旨を仰せつけられた。(『会津の歴史伝説』とっておきの33話・小島一男著) (発行所歴史春秋出版株式会社) 出典) (続く)